

建築家村野藤吾旧蔵建築竣工写真についての調査研究

笠原一人^{※1} 松隈洋^{※2} 石田潤一郎^{※3} 三宅拓也^{※4}

本調査研究は、20世紀の日本を代表する建築家村野藤吾の設計による建築作品の竣工時に撮影された写真について、現在所有、管理している MURANO Design の協力を得ながら、整理作業とデジタル化を進めてアーカイブを形成し、全貌を把握した上でその内容や特徴の考察を行うものである。2022・2023年度の2年間で、紙焼きの写真、約3,300枚をスキャンする作業を行った。建物の竣工時に雑誌や作品集等で発表された作品が大部分だが、雑誌や作品集等に掲載されておらず、未知のアングルや部分の写真が多数含まれており、また現存しない建物の写真も多い。今後の村野藤吾研究にとって貴重な資料である。

◎研究背景と目的

村野藤吾(1891-1989)は、大阪を拠点として活動し文化勲章をも受章した20世紀の日本を代表する建築家である。その建築作品についての5万点以上におよぶ図面資料は京都工芸繊維大学美術工芸資料館が収蔵し、現在も整理作業を進めながら調査研究や展覧会の開催を進めている。

一方、村野の建築作品の竣工時に撮影された写真は、当初村野・森建築事務所や遺族らが所有、管理していた。現在はその後継組織である MURANO Design が所有、管理している。これまで村野藤吾の建築作品についての竣工写真資料についての整理作業や調査研究は、未着手であった。

そこで本調査研究において、MURANO Design および関係者の全面的な協力を得ながら、これらの写真についての整理作業、デジタル化を進めてアーカイブを形成し、全貌を把握した上でその内容について、写真の構図や対象、撮影者、撮影時期、ビルディングタイプから整理を行い、その特徴について考察を行うものである。

村野の建築作品については、失われた作

品、あるいは改修によってオリジナルの姿を留めていない作品が数多く存在する。それらについては、もはや図面資料や写真資料でしか、当時の姿を理解することができない。また現存する村野の建築作品に修復や復元、改修が必要になった際にも、竣工写真は重要な資料となる。しかしながら、村野の建築作品の竣工写真資料については、これまで十分な調査がおこなわれず、全貌も把握されていない。

今後、村野藤吾やその建築作品の研究を進める上でも、村野藤吾の価値を広く永く伝えていく上でも写真資料は極めて貴重である。デジタル・データ化はその第一歩となる作業であり、村野藤吾研究としても貴重なものである。したがって本研究は、学術的、社会的にも大きな意義を持ち、従来にはない調査研究であるという独創性を持つ。

◎2年間の成果

本調査研究が対象とする写真資料は、MURANO Design と共同で実施した事前の簡易調査により、約120件の作品について、合計約4,000枚存在することが分かっ

※1 京都工芸繊維大学准教授 ※2 神奈川大学教授 ※3 武庫川女子大学教授 ※4 京都工芸繊維大学助教

ている。その中には箱根プリンスホテルや新高輪プリンスホテル、日生劇場など代表作も多数含まれているが、解体された戦前の名作である大阪のそごう百貨店心やキャバレー・アカダマ、京都の比叡山ホテルやドイツ文化研究所、また村野がインテリアを手掛けた客船あるぜんちん丸やぶらじる丸など、現存しない作品の竣工時の写真も多数含まれている。戦後についても、村野藤吾自邸や早稲田大学文学部校舎、新ダイビル、丸栄百貨店など、もはや現存しない作品、また関西大学校舎群のように建物が建て替えられたものも含まれる。また志摩観光ホテル（旧館）、京都宝ヶ池プリンスホテル、都ホテル京都など、近年改修や改装が進みインテリアを中心に部分的にオリジナルが現存しないものも多い。したがって写真画像は重要な記録資料である。

作業内容としては、まず封筒に入って段ボール箱に収まっている写真資料に、封筒および段ボール箱ごとにナンバリングを行い、作業がしやすいように整理を行った。そのうえで合計 3,274 枚の写真資料のスキャン作業を行った。TIFF 形式によるデータ保存と JPG 形式によるデータ保存を行った。そのため、オリジナルの写真の枚数とスキャン作業で生じたデータ点数に違いが生じている。これらの作業は、encamino に依頼した。またネガ（ポジ）が残されているものについては、保存のため、新たにキャビネ版に現像した。その写真を作品ごとにまとめ、レフィルに入れ、写真用フォルダーにまとめる作業を行った。これについては、本学の学生に作業を依頼した。

スキャンを行った写真資料の中には、これまでに判明している村野の建築作品として最古の合屋小児科（1928 年）が含まれる。これは、従来、村野の作品リストにも掲載されていなかったが、村野が渡辺節事

務所から独立する以前の 1928 年に竣工していることが、明らかになっている。そのほか、谷口医院（1937 年頃）、園田耳鼻科（1937 年頃）、柏原病院（1938 年）といった初期の作品も含まれる。これらは、従来、村野が設計したことは明らかにされているが、写真資料などはほとんど得られていないため、貴重である。戦前に村野が設計した大阪のキャバレー赤玉（1933 年）、独乙文化研究所（1935 年）、京都の都ホテル（1936 年）、大丸百貨店神戸店（1936 年）、大庄村役場（1938 年）、比叡山ホテル（1937 年）、アルゼンチナ丸（1939 年）、ブラジル丸（1939 年）、樞原神宮駅（1940 年）、中山半邸（1940 年）、中林邸（1941 年）、村野邸（1942 年）なども含まれている。これらは、一部の写真がすでに作品集などに掲載されているが、それ以上の詳細な写真が含まれている。戦後の作品では、志摩観光ホテル（1951-83 年）、高島屋日本橋店（1952 年）、丸栄百貨店（1953 年）、関西大学（1955 年-）、新ダイビル（1958 年）、近鉄百貨店阿倍野店（1958 年）、八幡市民会館（1958 年）、米子市公会堂（1958 年）、横浜市庁舎（1959 年）、中川邸（1959 年）、尼崎市庁舎（1962 年）、日本生命ビル日生劇場（1963 年）、常陸宮邸（1966 年）、千代田生命本社ビル（1966 年）、志摩観光ホテル（1969 年）、名古屋都ホテル（1970 年）、箱根樹木園（1971 年）、なだ万・山茶花荘（1976 年）、箱根プリンスホテル（1978 年）、宝塚市庁舎（1980 年）、新高輪プリンスホテル（1982 年）など、よく知られた作品の写真が含まれている。しかし、雑誌や作品集で公表されていない写真も多く、竣工当時の姿を知る上で貴重な資料である。加えて、志摩観光ホテルや千代田生命本社ビル、日本興業銀行本店の上棟式や竣工式などの写真も含まれている。

またスキャン作業と並行して、すでに現像されている建築作品の竣工時の写真資料約 1,200 枚を、作品ごとにまとめ、レフィルに入れ、写真用フォルダーにまとめる作業を行った。これについては、本学の学生が作業を行った。

整理した写真資料には、戦前の作品として、南大阪教会（1928 年）、森五商店（1931 年）、神戸大丸舎監の家（1931 年）、大阪パンション（1931 年）、そごう百貨店（1935 年）、ドイツ文化研究所（1935 年）、都ホテル（1936 年）、板谷生命ビル（1936 年）、宇部市民館（1937 年）、大庄村役場（1938 年）、中山悦治氏邸（1939 年）、近鉄樫原神宮駅（1940 年）、中山半邸（1940 年）、中林仁一郎氏邸（1941 年）、村野邸（1942 年）などがある。また戦後の作品としては、京都公楽会館（1949 年）、京都高島屋（1950 年）、近畿映画アポロ劇場（1950 年）、名古屋丸栄ホテル+附属劇場（1950 年）、やまとやしき百貨店（1951 年）、関西大学（1951 年）、志摩観光ホテル（1951 年）、東京銀行宝塚ゴルフクラブ（1951 年）、高島屋東京支店（1952 年）、中川邸（1952 年）、フジカワ画廊（1953 年）、丸栄百貨店（1953 年）、世界平和記念聖堂（1953 年）、千日前グランド劇場（1953 年）、南都銀行本店（1953 年）、近映会館（1954 年）、近鉄会館（1954 年）、ドウトン（1955 年）、プランタン（1956

年）、神戸新聞会館（1956 年）、近鉄百貨店阿倍野店（1957 年）、富田屋旅館（1957 年）、新大阪ビル（1958 年）、名古屋都ホテル（1963 年）、尼崎市庁舎（1962 年）、日本生命日比谷ビル（1963 年）、名古屋都ホテル（1963 年）、佐伯邸（1965 年）、近鉄本社ビル（1969 年）、近映レジャービルアポロ（1972 年）などがある。

戦前に竣工した作品として、南大阪教会や森五商店宇部市民館、大庄村役場、などが現存する一方で、半数以上は解体されてしまっている。戦後のものについても、関西大学、志摩観光ホテル、高島屋東京支店、世界平和記念聖堂などが現存する一方で、大半は解体されてしまっている。また志摩観光ホテル（旧館）、都ホテル京都など、近年改修や改装が進みインテリアを中心に部分的にオリジナルが現存しないものも多い。また雑誌や作品集で紹介されている作品であっても、掲載されていない写真も多く、これまで知られていないアングルの写真も多数存在する。また地鎮祭などの様子を写した写真も残されている。したがってこれらの写真資料は、村野の設計活動の具体的な様子を総合的に知るための記録として貴重なものである。

今後、これらの写真資料の内容を精査することで、研究、教育等に活用することが期待できる。